

環海異聞卷之十二



本船出帆并歸朝洋中之記

六月十六日 昨日迄海上諸事の用意悉く揃
 て出帆すは是迄海の大くあれども二日走り間を
 其水をりしより揃て試すは皆事始りき 次第に
 沖へ出るとは此の方より北の方より北の方より北の方
 同十八日 夕ツケといふ國の海上を走りて此方

今く海をりといふ

按ふは海をりといふオーストゼイありし

都より濠洲川往きありし月の生水の如く

ありしやや地圖を傳せんとて知るし

カナスタより武子四る星の海路と強て七月四日

此と是とダンツケといふ國のゴッペイカワと云

所ふ船とせむ

羅漢

此の洋る中前おるは船中問ふの仕物

かとも由來とせむ

此の地方よりの出荷の振ふる申は此の岬

より向地ス空イツケと云ふの海岸はカヒエアイ對向

に其方の瀬戸ありて狭し古船漸に艘カヒエアイなり

並して通るる船ふる申ス空イツケの算舟大

なりと云ふも申すなりと云ふも魚西亜の

新族の國なりと云ふ申

府下武里里方程人居家作もお連なりと

この家造り街道及寺塔の類もペトルブルカ
小変り事もなれば其の男女容貌も毎月
しき振あり但被り物少し変り多る候も
是の洋留中の使長上陸し別の人家と信
交り居たり是れ中流の燭硝と云
陸へ下り候はる何れなりと尋ふに
他境へ船を泊る事あり人等とこれ又燭硝
と海へ出り大流也と云り

此湊船の洋留出帆の旨はたろ高賃燭硝等
るる謝禮し出立せり
はより醫師を人畫師を人衆知せり
太十郎の上陸し舟下と見えり
上りて舟をとり志し江戸迄行も病死
同変り候事と候も遠航し候し
船中の事候り

魯西亞人の船より陸へ夜々出入り
按ダンツケハ第那馬兒加をり京都府をコツペン
ハーカーといふは京都府をありて山あり地方と

離るるゆりつかりとる申「コツペカワ」ハ「コンペンハトガ」
乃轉るると申「タニス」ハ「デネマルカ」の意名なり「コツペン
ハーガ」ハ「大地の東」ハ「セイラント」と「コツペカワ」の東の
海をふあり「ソンド」と「コツペカワ」の海をふありて「雪降」
の地と申す「コツペカワ」の地圖地誌を
載す和名存記ハ洋なり

同廿七日以 出船すより 大洋へ出づ

海中、暗礁多し 舟をりして 舟人殊のハ氣支

ハ能のやうす也

八月廿二日以 アンケリとりの國の海上を過

船中

海中海上より軍船一艘ありこれ本船向
て右方先のかさつるを昔つる物あり
は方よりはふ應ずる 石大先をもち
有彼軍船不審ふ思ひて之を潜望
する使岸レサノツト舟師^{カベタ}命し何船ふて
りくの老もきりて聞しむ カベタ 舟櫓ふ
飛舟^{カベタ}とループル おりのりて老音遠きふ達する遠果
和名カベタと云彼方言何のり
と以て高しとヤせしむ 何船ある我

一 船をなす

は一事め何ある事やと船中の人も尋ね
あるふ「ハラソーステ 拂島察とソウキ アンゲリ
國と毎交戦あり近頃ハラソーステ 數軍し
りれた又あせ来るもあさきしと軍船を
海へ送る國せし振子のふち船在中通船
せし故ハラソーステ 船のあせ来るあんと候
てかくの振舞しある者と申使序彼の都

ロンドンをとりていふふつを来るあしやせし

本船の使序の命文しとくアンゲリ國の内事と
いふ渡ふ船とあせ使序の海りあると結文く

は亦大渡を軍船も船程えしありハラソーステ
より奪るしとて彼軍船とも多くあふ
船あきとあるり

渡の古岸石あり夥くは無値しとあるり三
階の櫓あり番船もあり

けふより水蒸食物等と増し合 以下舟と無し

正何方をその法も増し合ふ事

按ふアングリキを漢又利無け方ありし

イギリスをより馮國あれども世々名譽の

英必あり都府を籠動とし近來魚石

亞國と得る事しけりあり今くは其

属せたりし心も種々相約の事ありし也

又其け方の藩忽と深く処る事あり

使節其都城をよりいづる極め方あり

け玉のり強行し得る船と寄せし漢の名を

芝草す 漢名推考する世界圖海流線と極國

すうふ 漢流線とありしは其の初めは

今よりして中絶とすし其岸レサットと

ハムトと又申は其より其線と引られ

國あり「ハムト」又「レモウ」の作

都府鑄版の世界圖 今圖より方圖四枚圖 求め

東多相あり共す 左右四面を

法見と研て取し上らるる方圖の物も海路
の朱線と川あり是は長崎洋面中同船の程
深き等ふりし作書^{ノコタテ}中其他圖と求め事
し^{ハニラ}も是を^{ハニラ}通し^{ハニラ}し^{ハニラ}る^{ハニラ}程^{ハニラ}然^{ハニラ}る^{ハニラ}海^{ハニラ}し
に^{ハニラ}海^{ハニラ}路^{ハニラ}の^{ハニラ}海^{ハニラ}路^{ハニラ}と^{ハニラ}注^{ハニラ}し^{ハニラ}る^{ハニラ}も^{ハニラ}一^{ハニラ}つ^{ハニラ}て^{ハニラ}四^{ハニラ}枚^{ハニラ}た^{ハニラ}朱
川^{ハニラ}と^{ハニラ}程^{ハニラ}あり^{ハニラ}は^{ハニラ}交^{ハニラ}編^{ハニラ}集^{ハニラ}考^{ハニラ}考^{ハニラ}の^{ハニラ}よ^{ハニラ}り^{ハニラ}と^{ハニラ}て^{ハニラ} 茂^{ハニラ}興^{ハニラ}
あ^{ハニラ}り^{ハニラ}し^{ハニラ}る^{ハニラ}も^{ハニラ}一^{ハニラ}つ^{ハニラ}て^{ハニラ}周^{ハニラ}り^{ハニラ}し^{ハニラ}る^{ハニラ}も^{ハニラ}一^{ハニラ}つ^{ハニラ}て^{ハニラ}檢^{ハニラ}閱^{ハニラ}し^{ハニラ}て^{ハニラ}別^{ハニラ}ふ^{ハニラ}原^{ハニラ}圖^{ハニラ}
と^{ハニラ}撰^{ハニラ}寫^{ハニラ}せ^{ハニラ}し^{ハニラ}る^{ハニラ}地^{ハニラ}名^{ハニラ}等^{ハニラ}と^{ハニラ}和^{ハニラ}解^{ハニラ}し^{ハニラ}其^{ハニラ}朱^{ハニラ}線^{ハニラ}の^{ハニラ}海^{ハニラ}

法^{ハニラ}と^{ハニラ}も^{ハニラ}撰^{ハニラ}寫^{ハニラ}し^{ハニラ}て^{ハニラ}撰^{ハニラ}圖^{ハニラ}四^{ハニラ}枚^{ハニラ}と^{ハニラ}形^{ハニラ}せ^{ハニラ}り^{ハニラ}に^{ハニラ}朱^{ハニラ}線^{ハニラ}
の^{ハニラ}ま^{ハニラ}じ^{ハニラ}の^{ハニラ}船^{ハニラ}の^{ハニラ}彼^{ハニラ}ま^{ハニラ}字^{ハニラ}を^{ハニラ}考^{ハニラ}考^{ハニラ}し^{ハニラ}て^{ハニラ}日^{ハニラ}並^{ハニラ}と^{ハニラ}注^{ハニラ}す^{ハニラ}其^{ハニラ}ま^{ハニラ}じ^{ハニラ}と^{ハニラ}
撰^{ハニラ}し^{ハニラ}て^{ハニラ}し^{ハニラ}る^{ハニラ}も^{ハニラ}一^{ハニラ}つ^{ハニラ}て^{ハニラ}右^{ハニラ}京^{ハニラ}圖^{ハニラ}撰^{ハニラ}本^{ハニラ}の^{ハニラ}外^{ハニラ}別^{ハニラ}ふ^{ハニラ}一^{ハニラ}幅^{ハニラ}の^{ハニラ}地^{ハニラ}
圖^{ハニラ}と^{ハニラ}作^{ハニラ}り^{ハニラ}に^{ハニラ}海^{ハニラ}路^{ハニラ}朱^{ハニラ}線^{ハニラ}日^{ハニラ}曆^{ハニラ}の^{ハニラ}ま^{ハニラ}じ^{ハニラ}と^{ハニラ}注^{ハニラ}せ^{ハニラ}る^{ハニラ}和^{ハニラ}
解^{ハニラ}し^{ハニラ}る^{ハニラ}も^{ハニラ}一^{ハニラ}つ^{ハニラ}て^{ハニラ}上^{ハニラ}ら^{ハニラ}る^{ハニラ}も^{ハニラ}一^{ハニラ}つ^{ハニラ}て^{ハニラ}ぬ^{ハニラ}

此圖及細考和解の日天意考考定する所
堅田房より問氏に令せしれ考考物といふ

此は朱線日曆の注し由れ。深き等暗記
し云ふし大いふ字をり深き等いふ所を

もせよ^{ソラオホ}は然^{ハツトニタル}る者^{ハツトニタル}暗^{ソラオホ}注あり彼人^{ソラオホ}其^{ソラオホ}言^{ソラオホ}下の

物^{ソラオホ}の形^{ソラオホ}中^{ソラオホ}終^{ソラオホ}後^{ソラオホ}日^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}事^{ソラオホ}あり^{ソラオホ}を^{ソラオホ}正^{ソラオホ}注^{ソラオホ}し

す^{ソラオホ}き^{ソラオホ}もの^{ソラオホ}也^{ソラオホ}ある^{ソラオホ}ア^{ソラオホ}ン^{ソラオホ}ゲ^{ソラオホ}リ^{ソラオホ}以^{ソラオホ}下^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}開^{ソラオホ}き

され^{ソラオホ}對^{ソラオホ}校^{ソラオホ}し^{ソラオホ}其^{ソラオホ}注^{ソラオホ}活^{ソラオホ}の^{ソラオホ}下^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}し^{ソラオホ}て

實^{ソラオホ}注^{ソラオホ}と^{ソラオホ}ある^{ソラオホ}もの^{ソラオホ}た^{ソラオホ}る^{ソラオホ}也^{ソラオホ}し

は^{ソラオホ}未^{ソラオホ}終^{ソラオホ}日^{ソラオホ}曆^{ソラオホ}ア^{ソラオホ}ン^{ソラオホ}ゲ^{ソラオホ}リ^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}より^{ソラオホ}我^{ソラオホ}も^{ソラオホ}終^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}あり^{ソラオホ}を^{ソラオホ}注^{ソラオホ}し^{ソラオホ}一^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}ペ^{ソラオホ}トル^{ソラオホ}ブル^{ソラオホ}ク^{ソラオホ}より^{ソラオホ}ア^{ソラオホ}ン^{ソラオホ}ゲ^{ソラオホ}リ^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}日^{ソラオホ}無^{ソラオホ}く^{ソラオホ}て^{ソラオホ}略^{ソラオホ}せ^{ソラオホ}り
是^{ソラオホ}は^{ソラオホ}ア^{ソラオホ}ン^{ソラオホ}ゲ^{ソラオホ}リ^{ソラオホ}を^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}上^{ソラオホ}に^{ソラオホ}常^{ソラオホ}く^{ソラオホ}通^{ソラオホ}船^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}あり^{ソラオホ}内^{ソラオホ}洋^{ソラオホ}
とも^{ソラオホ}い^{ソラオホ}ふ^{ソラオホ}き^{ソラオホ}万^{ソラオホ}ある^{ソラオホ}あり^{ソラオホ}と思^{ソラオホ}ふ^{ソラオホ}歐^{ソラオホ}羅^{ソラオホ}巴^{ソラオホ}洲^{ソラオホ}の^{ソラオホ}人^{ソラオホ}す^{ソラオホ}て^{ソラオホ}
航^{ソラオホ}海^{ソラオホ}と^{ソラオホ}常^{ソラオホ}と^{ソラオホ}す^{ソラオホ}る^{ソラオホ}あり^{ソラオホ}多^{ソラオホ}國^{ソラオホ}通^{ソラオホ}船^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}あり^{ソラオホ}日^{ソラオホ}曆^{ソラオホ}を^{ソラオホ}國^{ソラオホ}注^{ソラオホ}
駁^{ソラオホ}あり^{ソラオホ}は^{ソラオホ}交^{ソラオホ}の^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}注^{ソラオホ}の^{ソラオホ}為^{ソラオホ}に^{ソラオホ}空^{ソラオホ}測^{ソラオホ}せ^{ソラオホ}る^{ソラオホ}もの^{ソラオホ}也^{ソラオホ}し

長崎譯官より和解書上より彼年曆一子

八百三年八月十一日おペトルブルクと云ふ船す ^{彼の}

^年月^日あり^て我^等和^西之^年 ^とス^申譯^{あり}等^の言^の年

六月十二日と云ふ其^の日^に彼^の年^の曆

月^の日^の教^もお^違は^せる^もゆ^かく^の日^の長^くあり^ある

處^きる^も又^は是^の違^はふ^も何^れの^も大^地也

都^府より^アン^ゲリ^の注^の未^終日^曆と^云ふ^もあり

注^をお^もふ^も據^{あり}し

アニゲリ出帆彼國一千八百零三年九月廿

三日 我癸亥八月 廿日 小あさる 出帆より彼り記す所の日並

と推して我日曆ふあて減むある源あり

等時地の経緯よりおぼしき志るれ其以下の

経緯日並の源あり是よりと細くし朱

録日記の合考あるものと目とあるの意あり

セウコ 中宮後とありし事也

大正十一年一月一日 東京海軍省 海軍部 第一

同十二三日迄 供事此都の用事お濟し候ふて

此邊へ来る中本船出帆す

海流記と揃するふ出帆彼九月廿三日より

我癸亥八月八日小あさる源あり時記より四日の

よりいなり地圖海流線はふより引かむ

出帆後次第に南より向ふ洋中四方を山山の類に向

ふしむ但し初の内たの方ふがランツケ 阿多事院 五

とにあり

九月三日 以 カナリアヤトシヨクノ船を泊む

海流紀と按す多彼十月九日カナリア海

の内ペツロ湾ふ島船十五日迄滞船出入日数

七日かゝりて十六日出船と云ふされ彼十月九

日我八月廿二日なり 中滞船同廿四日

味りふ 到る日数六日也

按ふ此西弗利加古例の属す西洋の諸島

此加那里西弗利加を以て初度ふ今す明人

得所謂福島と云ふ船と云せ洋海に測量

と儀をあるは是は諸島敷在す其名をカナリア

といふペツロ島と云せ源流の地是地なり

再ハ原島の海流緯線と熱國するカナリア島を流す
もろ好の名「テナリア」即テネリフ也 此島ありて諸島
後よりハテネリフハ中加那里西島の内あり和蘭人は此島
初度とするありは是より西の方東西初度線の下ハペルロ島
乃名あり 漢島 此島ハ 拂郎察人の初度とするあり
魯西亜人も拂郎察人割 飼ては其島を以て初度とせり

海上日曆 歐羅巴洲より 亞弗利加洲に係る

彼 五月廿三日 出帆 我 八月八日 彼 同廿四日 我 同月九日

	彼	我	彼	我
	月廿五日	月十日	月廿六日	月十一日
	月廿七日	月十三日	月廿八日	月十三日
	月廿九日	月十四日	月三十日	月十五日
	十月一日	月十六日	月二日	月十七日
	月三日	月十八日	月四日	月十九日
	月五日	月廿日	月六日	月廿一日
	月七日	月廿三日	月八日	月廿三日
	月九日	月廿五日		

日教十六日おろそかなリヤト云

カナリヤニ我せよりの
世り達の所より淨転

伊新把 伊新把の領所をりしは前厚法小島

伊新把の領所をりしは前厚法小島

伊新把の領所をりしは前厚法小島

伊新把の領所をりしは前厚法小島

伊新把の領所をりしは前厚法小島

伊新把の領所をりしは前厚法小島

伊新把の領所をりしは前厚法小島

伊新把の領所をりしは前厚法小島

は序としは糸の命も程の長は彼かあす碍人土産
乃おととも船中へ幸ふ来る

蒲萄 形方ありは赤黒黄 蒲萄酒

梅ふカナリア ウヰ井 酒 その名高し上好の蒲萄
産する所ありし又カナリーセオーゲル我邦を

カナリーヤトリス鳥は地の名産ありし

柚 梨 橙 スイー 香橙 ソネシゴ 林檎 葱

ボネナ の菓子物 梅ふはる年仲ありし

豕 鶏 野牛 鶯 アヒル は糸程の産物ありし

船中より大の法を求め皆く用ひしなり 船中買
入あり

新なるを船増し加ふ船の人々上陸出入も
右十席の一人上陸せし娘子先申

人の屍を果入ふる物とけふありて求め船中載
す程もしき物と思ひ出てもんす蓋を閉きしあり
時をく福りのごきりてんかふ今一人の死體也

按ふ来乃伊をまじし福記小洋舟

付地通利金三角形ありとあり

出帆のそり急中より級人としてあるもの五六人

羅紗の披魯西要人の披と大抵三角帽を冠り

同くは船中需用のものあり

帽子類 又送りのものあり 按ふはれ伊新把佐要人 磁を

引きあき出帆せんとする時彼者等の方より空銃

砲とあり出帆又送りの物也とあり

右加那里更津急のり別ふあき福記を

月十日迄 カナリア出帆

按、海路記に彼十月十六日カナリア出帆あり

我九月一日とあり 以下 伊弗利加海より更墨 利加洲まで海程日曆

彼 十月十七日 我 九月二日 彼 十月十八日 我 九月三日

以下 十月三十日 我 十月十日をこ日並合す

彼 十月三十一日 我 九月十六日 彼 十月の日並 三十一日定数す

彼 十一月一日 我 九月十七日 彼 十一月二日 我 九月十八日

より以下 彼 十一月十日 我 九月廿八日をこ日並合す

圖と撫するも我六日より九日迄の百の海あり
いとゆる風ありと之程の静りある海あり
はるた然るに後百切り舟多浪子あり一日
の里移りて終し

彼 十月十三日 我 九月廿九日 彼 十月十四日 我 十月一日

より以下 彼 十月廿九日 我 十月十六日 是日並合す

按彼十月廿九日我十月十六日お當るの日

目十。ブラシリートのエカテリナのお島岸彼翌一子

八百零四年二月七日我同年十二月廿六日

是ちお滞りぬとる日数凡七十餘也

出船に及三四日の滞りの万と多あり通りしう
海は急に向ふては岸沖風吹き、船は己午の
方お走り是を数。沖は走りぬ。四五日の
風静あり暑氣極きて酷くおる。雷雨も
ありお入りし暑熱甚しき海上ありは
此世界の真中へ来りしと。船中祝儀ありぬ

其を海探の事せり其をエクトルといひたり
但し日本海航の時も
亦再びは其を通るなり

按ふエクトルを羅甸語を赤道の事也
此亦亞弗利加海に属す其海流化と檢
するの赤道並下と通船せしは彼十月
十四日か十五日の万我十月一日より同日
との万とる事

舟師我^{カベタシ}の語り加那里より南亞墨利加

乃海の上世界第一の平穩なる事
即ちエクトル
の事何れも一り年中は其の風も靜之波穩
なる事其より一りも其の風出る事其の
事其の不思議の事といふ事といひる事其
色風靜なる事其の船快く走る事其の帆板換
破る事

又イワンヒョークロイチといふ人語りたるエクトルの
下は海水動ぬものもある里数を測る事其も

供おくし如此船をりて、船のぬるる地所の
こゝをぬる南に北に汝道ありまぬ里
教もたらさるる事、七日も其の走れん
わぬふくし、船もあつたの船ふんぬり
解の活解
かみし

はさより南に一ツ星の北極星、七曜たふんぬり
ありし我々の船の舟をり、語り合ひぬる事、
と通る事、舟をり、舟をり、舟をり、舟をり

鏡ありて、是をいふ、何玉の船ありしや、
より船の小旗と振り、合せて通る事、

沖を走る海の水の色、変りし、
紅船ふ似て、
ふふ上あげても、同色なり、
南アメリカの、内なる海上、

南アメリカの、
以て、
水は、

十一月十日迄 南アメリカの内よりしエカチリチと
いふ大濠ふ船を泊む

按ふ海流記と據るに彼土月廿九日我十月廿日
忌岸にけふと海流の日曆前條に寫せるはし

けふの南アメリカ洲中の一つの大濠と云申城下も
エカチリチといふ

按 ブラシリー 伯西見の港と云申地圖に
通向たる者上ケもブラシリーと云申ブラシリーの南

ある銀河といふ川の海に注ぐ所をシントカナリナ

いふ地をいふ

再ハ原圖を熟考するに伯西見の
海に船を泊る朱線と云申ケ

ある所と云ふは此方地の岸をさし「サンカテリニ」といふ所を「エカチリ
ナ」といふ所といふは誤りありしは山をさし以南廿八度のをさしあり
和蘭人刊行せる度数の表より廿七度四十分より非蒲涅見撰
より輿地の考ふサンカテリナ 島は伯西見の海岸に属するに赤道以
南廿七度ありたるに航海する者無識するにこれ歐羅巴海に
西方より長途の所ありたるに航海船はふりてサ利水等船中の
用と舟し而後大南海に向ふるを伯西見の
海をいふ波も杜尾も人所領の地あり

は地ポルトガリ 波も杜尾も の領下と云申濠の大いあれ
せりも入海ありてふて浅く大船の岸よりはるるに能くす

は入江の河峯の海に流れる處をよとてある事

溪の内ふアングリ船武彼舟ふ室室船武彼船舟舟舟

はく濱をふ船の石方矢と佐(重なり)土地の舟の細長く

く世の葉の如く底丸木二割かしくお物一板を

お背もつ物にちもサハ江戸の猪舟舟舟の短

此亦年中異々年酷熱の地を冬季といふふいふは

船中何れも日ふ二二度つ水は浴せり魯西無人の何

程船長もあても層と云(アラハ)すといふあし水浴して

あるは此の物と忌守常の毛織物を忌守皮裘は夏
月あつ月ひぬといふことなり

土人を罵しペトルブルカを忌むる名ボウハ生息ありし

又夫より少く為忌男女たふ踏足且駭おす殺

引中と忌守カナリヤみて足あつ人の如く但拳毛縮

髪を眼の黒く女子もを忌し脊一尻長足の指指伝

きたるめき物とけ細か下の本糸又麻の織物あて

袴の裾尻ふ仕立もる指あつ物と忌用すまの魯西

の婦人ろやゝ男女たふ入雲のせは

小児も色悪く丸裸あり男女たふ歯のまゝし常ふ

松脂のめきりものと嚙む不刃口と齧るゝて指をみえ申

は漆より廿里程奥へ引け、千軒程のたぬ垣あり

太十市以上
陸より見たり 家造り、尾をて下とふまゝあり二尺程より

上、立石を以てまゝとあゝ屋根の檜の皮を引申

換ふは信分ぬあす

寺もありカロニアアの寺ろ高上ふ何れもたぬめき十

文字の物と建てあり寺月かえす禮拜の垢子と
えろふ我日本の人ろおゝこのめし

換ふは寺 ほんちユガルより 建てたあまゝし

津吉丈上陸ゝゝ水車あり米を舂する下とえあり

たぬ石造り屋根の檜の木と二ツ割ふゝゝて暮くを

く是をえぬ尾をのめゝ水車、一ツあり三十六碓

はりする 根ふ仕立あまゝ物也

は玉米野交種前すゝし 精米ふゝゝて多く他

テキル

玉の交易すしあり自玉を米と食ふものと持す
唐黍と粉を湯へ入る糊の如くして用ゆ米は
多く用ひず他國へ出さずを食ふは唐黍我
邦の物と同様本地の物なり

唐黍中粒買入牛豚豚鷄の餌とをせり山樹
木繁茂を乙ありおろし香橙橙は乙はあり餌
稻粟の方ふ大高山あり山頂まで中り登りれぬし
魯西亜人もは山をくぐり驚きあり

は下りる岸前洋中を橋といふし有るは
て海使等等の往く上陸し山を立来と買入
帆柱を作らり然るを粉くはる洋中

川き出し建物を造りて乙ありふりて堅固
赤き土を敷くあり赤き土を敷くは彼人カラスナ
ゼリワといひあり是れ赤土といふ也

産物夥し船中一箱も買合ふあり

松 ダイコン 菜菔 細い魚 蕪菁 カブラ 園 瓜 冬瓜

椰子のり 後集 別ふ詳書の得記あり

生りて喜ぶものすゝあるコッコスと多し船へ買ひぬかり
穂指は土産をかりとまりしり不元

長めを房をかきむらとのおぼろりて一葉をかき一節

緑色つ房之船角^{カド}を長^{ナガ}くすけあり初めは緑無字は

肉黄色とある喜ぶ月^{ツキ}ありて一葉をさくも色も純せり

物のやうに房内色白く味甘き^ホあけい^{木通}とやうに椰子の

あし一葉^{フサ}は三十房はくものこころ程あり木の子の

実りてす図をあせし大抵たのたし



一綿ハ山ト圃ふも種たね高たか六尺程ほどの草也
葉はも大おほれとも種たねの葉はも遠とほくありし

揚たか木き綿わたありし

一ツつ葉は木き葉は赤あかく卵たまご黄き色いろのふも石いしの殻か
船ふねの洞ほらハ木きの形かたち長ながくありし日ひ今いまハ
一いつこれ葉は撞つきありし

一魚いさなハ不足たりずと名なゆ小こ船ふねハ多おほし

一豚ぶたハ皆みな牙は生なじて背せの骨ほね甚おほく牛うしも同おなじ

一アブラ腹はら多おほし胎た多おほしとて魯ろ西せい無人むねび
食たを以もつ

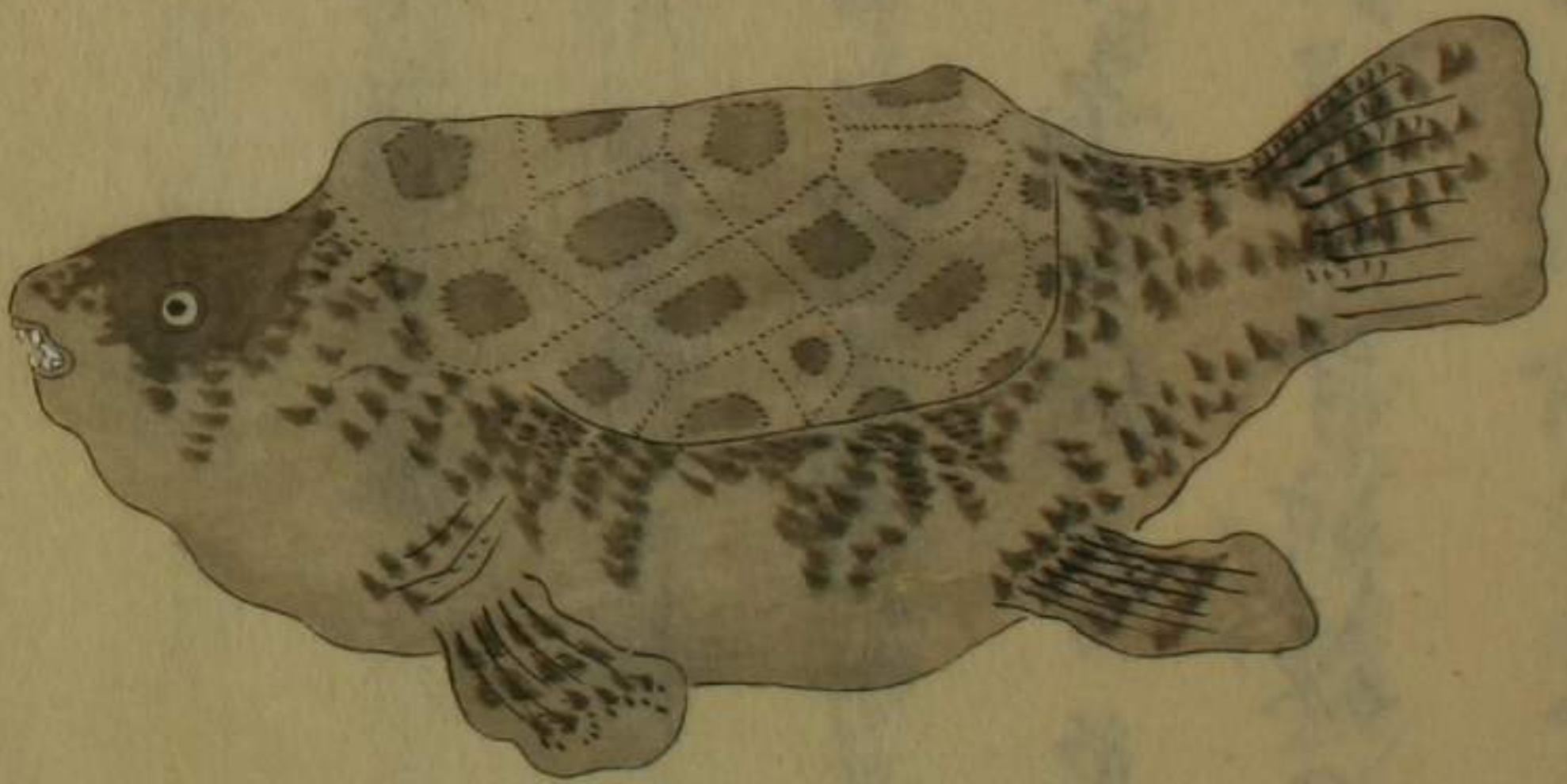
一青あお毛けみそ鼻はなと喙くちばしとハ赤あかく一いつ毛け甚おほく

一いき小こ舌したあり喙くちばしハキクきくといひ人

一舌したを吐はせハ鼻はなを以もつて吸すふなり名なも多おほし

一甲かぶつの四角よしかどみそ龜かめハ似にて魚いさなあり何なにといふ

一いのちやあ生なま名なハきくす河か緑ろくの肌かわハ似にてあり



一 猫^ニ之毛^{ナリ}我方^ノ之^ニ同^シく^シて^シ但^シ氣^ノ
 つ^キ地^ノ拍^ハふ^カ弱^クる^{コト}あり^キ振^テあり

一 尾^ノ長^ク様^{アリ}あり 形^ノ中^ニ入^リ飼^ヒ魚^トふ^不

目^ノ小^{カチ}鱗^ノあり

一 毛^ノ尾^ノ色^ヲ淡^ク白^ク喙^ノ長^ク尾^ノ毛^ハ虎^ノ斑^ト丈^ニ
 或^レ尺^ノ中^ニり^テ小^{カチ}割^レれ^易き^ニ 數^ノ多^ク魚^ノ身^ノ要^ス臭^ク
 あり^キ之^レを^シ定^メ買^フル^{コト} 形^ノ中^ニ小^{カチ}高^ク魚^トあり

此^ノ月^ノ甚^ク走^ルカ^チニ^シヤ^リツ^カ忌^ム岸^ノ時^ノ同^シ也

あまふり 砂の定 船中を走 鱗あり
一ガルカルゼル 一ツツ物の子をりし 四脚の
中きものと 船持系きり 骨の長サ三四
尺皮厚く 尾尾黒く 鱗浮き 赤尾
小棘刺あり 口のきれあがり 七寸斗
八寸斗生す 目の上ふ 微く 痛の如く あり
毛のあり 豚爪ハニホあり 七寸斗斗を
一月上 腹の如く あり 物生長す 角

なり 山の中 海の中 撫人とも 有り 食を云
常ふ 畫ふ 書かす 就と 入るふ 是と 何れ
根の中 足あり 就の子 あり 我と 中 食を
彼人 船中 あり 海 渡りて 殺し 身 薬と
つ 骨は 腸と 活き 月も ぬき 玉と 入る
生 物の 如く あり あり あり
揚子 諸 畜ふ あり コロコシル 者 息と 揚子 畜ふ
鱧 あり デルカルゼル コロコシル 小音 あり

ガルカルゼル図



をく且形状も鱷にお似たり和名を寫志圖
と云せども今く此れ同く少く
已しおとこもやいしに後ろあふ物々圖
を製するものたなりし
コロコシル 浮説ふあや

一は地を物と買ふハイシパンツケ 伊斯把你

の金銀を交易す

は不敷。滞在諸用整ひ出帆の用意をある

滞在の日報前條の
事あり

十二月廿八日 正カテリナ出帆

按ふ海路地を彼聖子なる四年二月八日出帆

と云ゆべき我同年十二月二十七日ふある

滞在の諸記を大抵合すは漢洋百七十一日也

は不敷と出帆南へ向ひ去りけるは是をハ異名熱裸地

とて堪へるはかりしハ先きに記す海土次第の事

是中ハ西聖利加大湖の正南の出帆の海上

をりといふあるは是を何れといふありと云

中の人も聞かぬとあるはゴリノメスト云ふあり

を記す所をりは待きく事ありと云ふ向ひ又至

て後集あるは向中を待たり此をより地方を

午の山にあり大燻立たり不絶也云々

南緯七十度より北緯七十度
火地ランドなり。

此の地は山の多い所なる風面を以て巨しくしてさうな
船を碇を以てしつゝ時を以てして波濤は南方の沖へ
流され難く。百切居る翌年三月に之を以て
雪降りて寒氣も強し船中の人員も亦少
の船も亦何處かへ公支しつゝいひりぬるある
いふに南へ流され七十度以上の海よりなり海
氷氷を以て通し船ありぬる事とす。

七十度より南を以て北緯七十度
いひりぬる南より北極下と同く極下より
近き所はかくあるも也。拂手察鑄版の世界
島より南極下より氷海果限の國あり。其の
漂流の島と出帆しサンバミヤウに五人を以てし
時多し。南緯七十度より北緯七十度
南緯七十度前後とありて見たり。漂流の島
南北極下より近き海を以て西極と寔を以てし

東首有る奇中の奇といふ海と又南
亞墨利加洲の狭長なる地帯冷帯あか
しきの大砂なり

七十度前後の通船もあるたそなふより更に通船
ありぬ也といふは凡人といひぬかの危難は方
かゝる如く西風も吹たりドーブラ ナデジタ
の方へ船ちりぬきや念せしむ

按ず彼玉板の世界圖に亞弗利加沙のカー

フデグーデホープ 和名名ふより明人
所謂喜望峯也 乃亦此

名ありたれた大洲の岬やと和名東の嶺
亦也北の岬もき船を多く走へし人ゆと

彼をすする月風吹たり暖風ふあり
ゴリノメスを
号り北の方へ向て走りりぬ
既ち暖氣の海上を走り

海中に沸水涌りたり如く足ゆるを
通船の

あつしう今思ふところの海上あつしうやと云ふ

マルケイサ達の航海日記

彼子台羅

二月八日 出帆

アメリカ

我亥

十二月廿七日

彼

二月九日

我

十二月廿八日

彼 二月十日

日 同廿九日

彼 日十日

我甲子

正月一日

浮き等 五方テリナと出帆三四日程ありて正月三日

彼

二月十二日

我甲子

正月二日

彼

二月十三日

我

正月三日

彼 二月十四日

我

正月四日

彼二月十五日我正月十四日を日並合す

我正月四日同十四日を一日乃里程甚短し

彼二月廿五日より我正月十六日を日並合す

彼 二月廿九日

我 正月十九日

間氏曰廿廿九日のあふ子の記号ありと云ふ

は年の二月閏日の記号とせしと云ふ

あて二月の名をへボラレといふ

二月例年廿八日

と廿九日とすあれ閏日をり添ふは二月廿八日ある年と廿九日ある年と云ふ事ありと云ふ也館の月より数時令の都載す

子ハエラといふ字ありてへボラレと配音する乃

首字あるは字を以て閏日の化歸とすとの事

彼 二月一日 我 正月廿日 彼 三月二日 我 正月廿一日

彼 二月二日より 我 正月三十日迄日並合す

彼 三月十二日 我 二月九日 彼 三月十三日 我 二月二日

彼 三月十四日 我 二月二十日より 彼 二月廿九日 我 二月十八日

と日並合す 我 二月五日か同十八日をゴリメス

ありけり 正月より 二月あり 海流化と云ふも一りり

里程古程大程あり 程々日数十程の百思中

十八日より十九日の百乃里程程々順風とけり

アノカ

彼 三月二十日 我 二月十九日 彼 三月廿一日 我 二月廿日

四月一日 二月廿一日 四月二日 二月廿二日

四月三日 二月廿三日より 彼 四月八日 我 二月廿六日

中々日並合す

我十八日か廿八日まで 十日の百も亦百切り居り

日と積るる振子あり エカテリナと書きては

中そ六十二日を経りて又事は万七千文の通り
多かりしむく公支せし事と思ふ廿八日
順風を待つ岬と多かりし北に向ふて又あり

彼 四月九日 我 二月廿九日 彼 四月十日 我 三月一日

四月十日より二十日迄我日並ふ余 彼四月 我 三十日

三月廿一日と一何ある

彼 五月九日 我 三月廿二日

河氏曰彼五月とマアイトりふある 云の

記簿あり 云の首字なりは記簿は海路

日曆のつれとすはる西暦利加の西暦
前ふある二月閏日の記簿を以て海路の日
曆を推測するの證據とするなりと

彼 五月二日より八日を我日並ふ合し彼五月八日

我三月廿九日あり

彼 五月九日 我 三月三十日 彼 五月十日 我 四月一日

日十一日 四月二日 日十二日 日十三日

此海彼五月廿三日我四月十四日也且至今

環海異聞卷之十二

